買出し

永井荷風

青空文庫

船橋と野田との間を往復してゐる総武鉄道の支線電車は、米や薩摩芋の買出しをする人より外にはあまり乗るものがないので、誰言ふとなく買出電車と呼ばれてゐる。車は大抵二三輛つながれてゐるが、窓には一枚の硝子もなく出入口の戸には古板が打付けてあるばかりなので、朽廃した貨車のやうにも見られる。板張の腰掛もあたり前の身なりをしてゐては腰のかけやうもないほど壊れたり汚れたりしてゐる。一日にわづか三四回。昼の中しか運転されないので、いつも雑沓する車内の光景は曇つた暗い日など、どれが荷物で、どれが人だか見分けのつかないほど暗淡としてゐる。

この間中、利根川の汎濫したゝめ埼玉栃木の方面のみならず、東京市川の間さへ二三日交通が途絶えてゐたので、線路の修復と共に、この買出電車の雑沓はいつもより亦一層激しくなつてゐた或日の朝も十時頃である。列車が間もなく船橋の駅へ着かうといふ二ツ三ツ手前の駅へ来かゝるころ、誰が言出したともなく船橋の駅には巡査や刑事が張込んでゐて、持ち物を調べるといふ警告が電光の如く買出し連中の間に伝へられた。

いづれも今朝方、夜明の一番列車で出て来て、思ひ〳〵に知合ひの農家をたづね歩き、買出した物を背負つて、昼頃には逸早く東京へ戻り、其日の商ひをしやうといふ連中である。どこでもいゝから車が駐り次第、次の駅で降りて様子を窺ひ、無事さうならそのまゝ乗り直すし、悪さうなら船橋まで歩いて京成電車へ乗つて帰るがいゝと言ふものもある。乗つて来た道を逆に柏の方へ戻つて上野へ出たらばどうだらうと言ふものもある。やがて其中の一人が下におろしたズツクの袋を背負ひ直すのを見ると、乗客の大半は臆病風に襲はれた兵卒も同様、男も女も仕度を仕直し、車が駐るのをおそしと先を争つて駅のプラツトフオームへ降りた。

「どこだと思つたら、此処か。」と駅の名を見て地理を知つてゐるものは、すた〳〵改札口から街道へと出て行くと、案内知らぬ連中はぞろ〳〵その後へついて行く。

「いつだつたか一度来たことがあつたやうだな。」

「この辺の百姓は人の足元を見やがるんで買ひにくい処だ。」

「その時分はお金ばつかりぢや売つてくれねえから、買出しに来るたんび足袋だの手拭だの持つて来てやつたもんだ。」

「もう少し行くとたしか中山へ行くバスがある筈だよ。」

こんな話が重い荷を背負つて歩いて行く人達の口から聞かれる。

十月初、雲一ツなく晴れわたつた小春日和。田圃の稲はもう刈取られて畦道に掛けられ、畠には京菜と大根の葉が毛氈でも敷いたやうにひかつてゐる。百舌の鳴きわたる木々の梢は薄く色づき、菊や山茶花のそろ〳〵咲き初めた農家の庭には柿が真赤に熟してゐる。歩くには好い時節である。買出電車から降りた人達はおのづと列をなして、田舎道を思ひ〳〵目ざす方へと前かゞまりに重い物を負ひながら歩いて行く。その身なりを見ると言合せたやうに、男は襤褸同然のスヱータか国民服に黄色の古帽子、破れた半靴。また草履ばき。年は大方四十がらみ。女もその年頃のものが多く、汚れた古手拭の頬冠り、つぎはぎのモンペに足袋はだしもある。中には能くあんな重いものが背負へると思はれるやうな皺だらけの婆さんも交つてゐた。

やがて小半時も歩きつゞけてゐる中、行列は次第々々にとぎれて、歩き馴れたものがどん〳〵先になり、足の弱いものが三人四人と取

り残されて行く。その中には早くも路傍の草の上に重荷をおろして休むものも出て来るので、同じやうな身なりをして同じやうな荷を背負つてゐても、暫くの中に買出電車から降りた人だか、または近処の者だか見分けがつかないやうになつた。

道しるべの古びた石の立つてゐる榎の木蔭。曼珠沙華の真赤に咲いてゐる道のとある曲角に、最前から荷をおろして休んでゐた一人の婆さんがある。婆さんは後から来て休みもせずどん〳〵先へと歩いて行く人達の後姿をぼんやり見送つてゐたが、すぐには立上らうともしなかつた。

するとまた後から歩いて来た、それは四十あまりのかみさんが、電車の中での知合らしく、婆さんの顔を見て、

「おや、おばさん、大抵ぢやないね。わたしも一休みしやうか。」

「もう何時だらうね。」と婆さんは眩しさうに秋晴の日脚を眺めた。

「追ツつけもうお午でせう。わるくするとこの塩梅ぢや、今日はあふれだね。」

「線路づたひに船橋へ行つた方がよかつたかも知れないね。」

「わたしやさつぱり道がわからないんだよ。おばさんは知つてゐなさるのかね。」

「知つてゐるやうな気もするんだよ。知つてゐたつて、たつた一度隣組の人と一緒に来たんだから、どこがどうだか、かいもく分りやアしない。久しい前のことさ。戦争にやなつてゐたが、まだ空襲にやならなかつた時分さ。」

「戦争になつてから、もう十年だね。戦争が終つてもこの様子ぢや、行先はどうなるんだらう。買出しも今日みたやうな目にあふと全く楽ぢやないからね。」

「全くさ。お前さんなんぞがそんな事を言つてたら、わたしなんぞ此年になつちや、どうしていゝか分りやアしない。」

「おばさん、いくつになんなさる。」

「六十八さ。もう駄目だよ。ついこの間まで六貫や七貫平気で背負へたんだがね。年にや勝てない。」

「さうですか。えらいね。わたしなんぞ今からこれぢや先が思ひやられます。」

「その時にや若いものがどうにかしてくれるよ。息子さんや娘さんが黙つちやアゐないから。」

「それなら有り難いが、今時の倅や娘ぢや当にやなりません。道端で愚痴をこぼしてゐても仕様がない。大分休んだから、そろ〳〵出かけませうか。」

かみさんらしい女がズツクの袋を背負ひ直したので、婆さんも萌葱の大風呂敷に包んだ米の袋を背負ひ、不案内な田舎道を二人つれ立つて歩きはじめた。

「おばさん。東京はどこです。本所ですか。」

「箱崎ですよ。」

「箱崎は焼けなかつたさうですね。能うございましたね。わたしは錦糸町でしたからね。生命からがら、何一ツ持ち出せなかつたんですよ。」

「わたしもさうですよ。佐賀町で奉公してゐましたから。着のみ着のまゝですよ。上の橋の側に丸角さんて云ふ瀬戸物の問屋さんがあります。そのお店の賄ひをしてゐたんですがね。旦那も大旦那もなくなつたんですよ。わたし見たやうな、どうでもいゝものが焼ど一ツしないで助つて、ねえ、お前さん、何一ツ不自由のない旦那方が

あの始末だからね。人の身の上ほどわからないものはないと、つく〳〵〳〵さう思ふんだよ。」

「おや、正午ぢやないかね。あのサイレンは。」とおかみさんはさして遠くもないらしいサイレンが異つた方角から一度に鳴出すのを聞きつけた。婆さんは一向頓着しない様子で、頬冠の手拭を取つて額の汗をふきながら、見れば一歩二歩おくれながら歩いてゐる。

「そこいらで仕度をしやうかね。いくら急いだつて歩けるだけしきや歩けないからね。」

おかみさんは道端に茂つてゐる椿の大木の下に破れた小さな辻堂の立つてゐるのを見て、その砌に背中の物をおろした。あちこちで頻に鶏が鳴いてゐる。婆さんもその傍に風呂敷包をおろしたが、何もせず、かみさんが握飯の包を解くのを見ながら黙つてゐる。

「おばさん、どうした。」

「わたしはまだいゝよ。」

「さう。それアわるかつたね。わたしや休んでるから。」

「かまはずにおやんなさい。わたしや休んでるから。」

おかみさんは弁当の包を解き大きな握飯を両手に持ち側目もふらず貪り初めたが、婆さんは身を折曲げ蹲踞んだ膝を両手に抱込んだまゝ黙つてゐるのに気がつき、

「おばさん、どうかしたのかい。気分でもわりいかい。」

一向返事をしないので、耳でも遠いのか、それとも話をするのが面倒なのかも知れないと、おかみさんは一ツ残した握飯をせつせと口の中へ入れてしまひ、沢庵漬をばり〳〵、指の先を嘗めて拭きながら、見れば婆さんはのめるやうに両膝の間に顔を突込み、大きな鼾をかいてゐるので、年寄と子供ほど呑気なものはない。処嫌はず高鼾で昼寐をするとでも思つたらしく、

「おばさん。起きなよ。出かけるよ。」と言つたが一向起きる様子もないので、袋を背負ひ直して、もう一度、「ぢや先へ行きますよ。」

その時、婆さんの身体が前の方へめつたので、おかみさんは初て様子のをかしいのに心づき、後から抱き起すと、婆さんはもう目をつぶつて口から泡を吹いてゐる。

「おばさん。どうしたの。どうしたの。しつかりおし。」

婆さんの肩へ手をかけて揺ぶりながら耳に口をつけて呼んで見たが、返事はなく、手を放せばたわいなく倒れてしまふらしい。

あたりを見まはしても、目のとゞくかぎり続いてゐる葱と大根と菠薐草の畠には、小春の日かげの際限なくきらめき渡つてゐるばかりで人影はなく、農家の屋根も見えない。馬力が一台来かゝつたが二人の様子には見向きもせずに行つてしまつた。おかみさんはふとこの間、隣に住んでゐる年寄が洗湯からかへつて来て話をしてゐる中にころりと死んでしまつた其場の事を思出した。

「やつぱりお陀仏だ。」

暫くあたりを見廻してゐたが、忽ち何か思ひついたらしく背負ひ直したズツクの袋をまたもや地におろし、婆さんの包と共に辻堂の縁先まで引摺つて行き、買出して来た薩摩芋と婆さんの白米とを手早く入れかへてしまつた。その頃薩摩芋は一貫目六七十円、白米は一升百七八十円まで騰貴してゐたのである。

おかみさんは古手拭の頬冠を結び直し、日向の一本道を振返りもせずに、すた〳〵歩み去つた。

道はやがて低くなつたかと思ふとまた爪先上りになつた其行先を、

遥向(はるむか)うの岡の上に茂つた松林の間に没してゐる。その辺から牛の鳴く声がきこえる。おかみさんは息を切らさぬばかり、追はれるやうに無暗と歩きつゞけたので、総身から湧き出る汗。拭いても拭いても額から流れる汗が目に入るので、どうしても一休みしなければならない。今からあんまり無理をすると此方(こつち)も途中でへたばりはしまいかと思ひながら、それでも構はず、時には轍(わだち)の跡につまづきよろめきながらも、向に見える松林を越すまでは死んでも休むまいと思つた。おかみさんは振返つて自分の来た道が一目に見通される範囲に、その身を置くことが一歩々々恐しく思はれてならなくなつたのだ。倒れたら四ツ這ひになつて這はうとも、一まづ向に見える松林の彼方(かなた)まで行つてしまひたくてならない。

彼処(あすこ)まで行つてしまひさへすれば、松林一ツ越してさへしまへば、何の訳もなく境がちがつて、死人の物を横取りして来た場所からは関係なく遠ざかつたやうな気がするだらうと思つたのだ。行き合ふ人や後から来る人に顔を見られても、彼処(あすこ)まで行つてしまへば何処から来たのだか分るまいと云ふやうな気がするのである。

この心持は間違つてはゐなかつた。やつとの事、肩で息をしながら坂道を登りきつて、松林に入り小笹と幹との間から行先を見ると、全く別の処へ来たやうにあたりの景色も、木立の様子も、気のせいかすつかり変つてゐる。畠の作物もその種類がちがつてゐる。茅葺の農家のみならず、瓦葺の二階建に硝子戸を引き廻した門構の家も交つてゐる。松林の中は日蔭になつて吹き通ふ風の涼しさ。おかみさんはほつと息をついて蹲踞(しやがみ)かけると、背負つた米の重さで後に倒れ、暫くは起きられなかつた。

その時自転車に乗つた中年の男が同じ坂道を上つて来て、おかみさんの身近に車を駐めて汗を拭き巻煙草に火をつけた。おかみさんはそれとなく其男の様子を見ると、これから買出しに行くものらしく、車の後には畳んだズツクの袋らしいものを縛りつけてゐる。おかみさんは恐る〳〵、

「旦那、何かお買物ですか。」と話しかけた。

「駄目だよ。こちとらの手にやおへないよ。」

「売惜しみをしますからね。容易なこツちやありません。」

「全くさね。それにお米ときたらとても駄目だ。いゝなり放題お金の外に何かやらなけれア出しさうもないよ。」

「わたしもさんざ好きなことを言はれたんですよ。それでもやつと少しばかり分けて貰ひました。」

「この掛合は男よりも女の方がいゝやうだね。一升弐百円だつて言ふぢやないか。うそ見たやうだ。」

「東京へ持込めば、旦那、処によるともつと値上りしますよ。御相談次第で、何なら、お譲りしてもいゝんですよ。」

「さうか。それア有りがたい。何升持つてゐる。」

「一斗五升あります。持ち重りがするんでね、すこし風邪は引いてますし、買つておくんなさるなら、願つたり叶つたりです。」

「ちや、おかみさん。一升百八十円でどうだ。」

「その相場で買つて来たんですから、旦那、五円づゝ儲けさして下さいよ。」

男はおかみさんの袋を両手に持上げて重みを計り、あたりに一寸(ちよつと)気を配りながら自転車の後に縛りつけた袋と、棒のついた秤(はかり)とを取りおろした。

取引はすぐに済んだ。

おかみさんは身軽になつた懐中に男の支払つた札束をしまひ、米を載せて走り去る男の後姿を見送りながら松林を出た。林の中には小鳥が囀り草むらには虫が鳴いてゐる。

青空文庫情報

底本：「ふるさと文学館　第一三巻　【千葉】」ぎょうせい
　　1994（平成6）年11月15日初版発行
入力：H.YAM
校正：米田
2011年1月29日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

買出し

永井荷風

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/